

# 川崎市夢見ヶ崎動物公園とのコラボ催事

－神奈川県立川崎図書館ミニ展示の記録－

高田 高史

## 1 はじめに

神奈川県立川崎図書館（以下「当館」という。）では、2012年度にミニ展示「読む 知る 感じる 夢見ヶ崎動物公園」を開催した（開催：2013年1月11日から3月31日）。

一つの催事ではあるが、以下に記すように様々な試みを行っていた。当時、考えていたことを含めて、ここに記録しておく。今後の当館のみならず、他の図書館等でも参考になる要素はあるだろう。

なお、当館は2018年に移転・再開館をしている。「ミニ展示」は「ものづくりギャラリー」へと名前を変えるなど、館の施設や組織の名称等は、現在と異なっている。夢見ヶ崎動物公園に関する記述も、催事の時点での記載であることを留意して読んでいただきたい。



図1 ミニ展示「読む 知る 感じる 夢見ヶ崎動物公園」の会場

当時、川崎市川崎区富士見に所在していた当館では、数ヶ月に一度、ミニ展示という催事を行っていた。図書館としては、かなり手間をかけている展示であるが、開館当初はより大掛かりな展示を1階で開催していたことや、博物館レベルの展示と勘違いする来館者もいたことから、敢えて「ミニ」を付けていた。

ミニ展示の会場は、図書館入り口の階段を登って正面の2階で、3階(科学技術室)への動線上にあり、多くの方が足を止めていた。

ミニ展示の担当は、当時、事業部にあった三つの課(科学情報課、産業情報課、資料整備課)が持ち回りでおこなっていた。私は、科学情報課に属しており、同課で行う展示の主担当をしていた。ミニ展示は担当課の一大イベントであり、非常勤職員を含め、ほぼ全員の課員が何らかの準備にあっていた。私は、自分で準備をするだけでなく、進捗状況を確認したり、課員に仕事を割り振ったりする監督的な立場でもあった。

## 2 企画の始動

現在、手元に「ZOO & 水族館プロジェクト始動」という2012年8月に作成したA4版の紙1枚の企画書がある。メモ書きのような内容で、おそらく上司(課長)に口頭で提案し、「進めていいよ」の言葉をもらった直後にまとめたものである。

この初期の企画書には、県内の主な動物園4か所と、水族館6か所がリストアップしてあり、「以上の動物園・水族館のパネルを作成する。沿革・特色ある生物などを紹介する。各施設のパンフレット・ポスター等を送ってもらい配布・掲示する。」(注:読みやすくするため、文意を変えず一部の文章を整えている。以下の引用箇所も同じ。)と書かれている。この時点では、県内の動物園・水族館の紹介をメインとした展示にするつもりであった。

さらに、「いくつかの動物園・水族館をクローズアップする。取材にも行く。展示ケースの都合上、水族館・動物園で計5か所くらいか。飼育員さんには、おすすめの動物か魚の本を教えてもらおう。これは何?という道具

や、動物にまつわるモノを借りる。飼育生物や施設に関する文献も紹介する。」と続く。

私は展示等の催事に際して、「なぜ図書館でやるのか」という意義を明確にしたいと思っている。所蔵資料を中心に据え、利用に結びつけるという流れが理想であろう。仮に、どこかのギャラリーや市民ホールで好評だった催事を、そのまま図書館で実施すれば、評判になるであろうが、「図書館で開催する必然性はどこにある？」という点では疑問が残る。とはいえ、そうした催事も、来館のきっかけとなる、話題になる、マスコミなどに取り上げられやすい、などのメリットがあるので否定をするわけではない。

### 3 夢見ヶ崎動物公園への依頼

さて、先程の企画書に沿って、県内の動物園や水族館へ、当館展示の説明文および展示への協力の依頼状の郵送を始めた。

依頼状の文面にある「ぜひ、お願いしたいこと」という項目には「スタッフの方による、おすすめの本の紹介」と記している。また希望する展示品として「動物園・水族館ならではの品物」と書いている。例えば、特定の魚をすくう網、のような飼育用具をイメージしていた。その他、関連講演の依頼、グッズの借用などをあげている。

相手側からどのような反応があるのか、見当がつかなかったため、数か所ずつ小出しに依頼してみることにした。第一弾として、9月中旬に、A動物園、B水族館、および川崎市夢見ヶ崎動物公園の3か所に依頼状等を郵送している。

A動物園からは、しばらく返事がなかった。無償で協力を依頼している立場上、強くお願いするわけにはいかず、「あまり乗り気ではないのかも」と静観していた。（かなり時間が経ってから、協力ができる可能性があるという連絡を受けたが、すでに夢見ヶ崎動物公園との企画が進んでいた時期であったため見送った）。

B水族館からは、展示に協力することはできるが、水槽と魚を貸し出す既存のプランでしか対応できず、相応の費用や手間がかかるという連絡が

あった。当館とは条件があわなかった。

夢見ヶ崎動物公園からは、前向きに検討したいとの連絡がすぐにあった。この時点では夢見ヶ崎動物公園のことを、失礼ながら私はあまり知らなかった。同じ川崎市内の公立の施設だし、協力を得やすいかもしれない程度の認識だったと思う。連絡を受けて、さっそく夢見ヶ崎動物公園に説明に赴いたところ、当館の企画について非常に好意的で、展示品の候補など、その場で提示があった。

展示をするスペースが限られていることもあり、この感触なら、夢見ヶ崎動物公園に絞った展示にしたほうがうまくいきそうだと判断した。その旨を上司に伝え、他の動物園や水族館への依頼状の発送は取りやめることにした。夢見ヶ崎動物公園は入園料が無料なので、来館者にPRがしやすいという利点もあった。

この時点で10月上旬である。展示を1月11日から始めることは決まっているので、約2か月間で準備を進めることとなる。

#### 4 パネルの作成

まず、夢見ヶ崎動物公園（以下、「動物公園」と略す）には、どんな動物がいるのかを紹介するパネルを作るため、動物の写真を撮ることとした。打ち合わせや取材などで動物公園に赴く際には、職員がカメラを持って行き、次々に動物を撮影していった。とくにカメラの腕の立つ職員がいたわけではなかったので、たくさん撮った写真の中から、うまく撮れたものを選んでいった。「この動物の写真がまだ撮れていないので、次に行ったときに撮ってきて」などと遣り取りをしていたこともある。休日に遊びがてら撮影にいった職員もいた。

どうしても、うまく写真が撮れなかった動物の写真は、動物公園に提供してもらった。当館で撮影したものより数段見栄えのする写真が送られてきた。

通常、展示に用いるパネルは、普通紙にレーザーのカラープリンターで印刷し、のり付きパネルに貼って作成していた。今回は動物の写真をすこ

しでも綺麗に見せたかったので、中厚口の写真用の印刷用紙を購入し印刷した。

写真のパネルとともに、それらの動物を解説するパネルも作った。当館の資料（おもに動物関係の図鑑、図書など）をもとに数行の解説を書いていった。出典とした資料名の記載は勿論であるが、資料自体の紹介も行った。例えばオグロプレーリードッグであれば、①『シートン動物記 10』（シートン著 紀伊国屋書店 1998年刊行）…「シートン本人の観察や他の研究者の話を基に、未開地の開拓により崩れた生態系の影響で増えすぎたプレーリードッグと人間との攻防もまじえ、生態が詳しく描かれています。」、②『地中生命の驚異』（デイヴィッド・W. ウォルフ著 青土社 2003年刊行）…「菌類や微生物など、地中に棲む生物たちの世界を通して生命の起源から生態系の未来までを考察した本です。プレーリードッグもアメリカ西部の草原の、生態系の要石として紹介されています。」と記している。欄外には「仲間と出会うと鼻と鼻をくっつけて「キス」でご挨拶」のような豆知識も載せた。



図2 ボードに掲示した飼育動物のパネル

## 5 取材および飼育係の協力

展示では、普段見ることができない動物公園のバックヤードを紹介したいし、直接、飼育係に取材をして確かめたい事柄もあった。シマウマ、レッサーパンダ、ペンギンなど、いくつかの動物をクローズアップして取り上げることにした。それぞれの飼育係に日程を調整してもらい、課員に割り振って取材に行くことにした。なるべく多くの課員が携われるように配慮した。この動物は誰が担当など、課員の中でもだいたい分担ができていった記憶がある。

取材の例として、レッサーパンダの飼育係へのインタビューでは「Q：かわいいと思う時はどんな時ですか？」「A：えさの竹の葉を全部食べてくれた時です。でも、夏の終わりはきれいに全部食べてくれません。なぜなら、その時期の竹の葉はタケノコになるための準備でありあまり美味しくないからです。」とまとめている。取材した内容は、動物公園の確認を得た上でパネルにしていた。ほかにも、調理室にある野菜、ペンギンのエサのアジや水槽の水を循環させる装置などを撮影し簡単な解説を付けてパネルにした。バックヤード関係のパネルはボードに掲示し「動物公園のバックヤード」というコーナーを設けた。

こうした取材に加え、過去の新聞記事などを参考にしながら、ユニークな内容のものは「ゆめみこらむ～〇〇のパワースポット」というパネルにまとめた。例えば、29頭の親となった5代目ボスのマーコール（ヒマラヤ山脈などに住む野生のヤギ）に関するコラムは「子宝のパワースポット」として紹介した。動物公園入り口にある小鳥のオブジェ（近所の人が服を着せたりしているという）は何のパワースポットとしていいのわからず、悩んだ末、「優しさのパワースポット」とした。

飼育係には、本を紹介してもらい「飼育係さんのオススメ本」というコーナーで取り上げた。各々に複数の本をあげてもらい、その中から、当館所蔵のものを優先的に選んでいった。いくつかの本には「野生動物の素晴らしさを感じられる。挿絵が素晴らしい。」や「私がムササビ観察を始めるきっかけとなった本。これを読むとムササビの滑空が見たくなります。」な

ど、短いコメントも添えられていたので、POP風に表示した。動物公園からは、飼育係の似顔絵の提供があったので、より飼育係を身近に感じられるコーナーとなった。



図3 飼育係さんのオススメ本のコーナー

以上に加えて、動物公園へのアクセス方法や園内図などもパネルにして掲示をした。

## 6 展示品の借用

展示品は、動物公園からいろいろな提案を受けたが、ケース内のスペースは限られている。また、あくまで図書館での簡易な展示で、保険などはかけられないため、非常に貴重なものや、壊れたら困るものなどは除外して決めていった。

借用した品は、レッサーパンダが食べた笹(ちぎった跡のある笹)、レッサーパンダの糞、ペンギンタグ(ペンギンの固体を識別するためのマーク。結束バンドなどで自作)、ホンシュウジカのツノ、シベリアヘラジカのツノ、シマウマ一日分のエサ(チモシー牧草5Kgや草食動物用ペレットほか)、いろいろな動物のエサ(ペレット、塩、にぼし、ひまわりの種、牡蠣粉、ほか)、チリーフラミンゴやフサホロホロチョウの羽、コーヒー豆の袋(床ずれの防止や保温などの目的で使用。動物公園では「ドンゴロス」と呼ん

でいる)、鳥の卵殻標本(中身を抜いた卵。チリーフラミンゴ、インドクジャクほか。)、吹き矢と筒(麻酔用。今はほとんど麻酔銃を使用)、もんじゃ焼き用のヘラ(フンなどの掃除に便利)、検卵ランプ(有精卵か見分ける手作りの装置)などである。解説や使い方は、写真を交えたパネルにまとめた。

レッサーパンダは希少種であり、その糞について展示用途で貸出できるものなのか、動物公園は「種の保存法(環境省)」で確認したそうである。この糞の展示に際しては、わざと高級そうな感じを出そうと、木の箱に綿を敷き、その上に飾った。

鳥の羽は発泡スチロールに刺して立てるときれいに見えた。

鳥の卵殻標本は転がって割れると申し訳ない。そこで、オレンジ色の紙をシュレッターで裁断し箱に詰めた上に卵を置いた。安定した上、巢のような感じが出た。

動物公園を訪問した際に、空になった動物のエサの袋がたくさんあったので貰ってきた。動物公園としては日常的に見慣れている品なので「そんなの何に使うの?」という反応であったが、こちらにとっては珍しく、いろいろなディスプレイに活用できそうだった。返却は不要とのことだったので、袋を切って広げ、展示ケースなどの下に貼った。「動物園用固形飼料草食動物用」などと書いてある大きな袋は、展示会場でも目立っていた。

展示品は、動物公園の車で届けてもらい、展示に際しての説明を受けた。動物のエサはかなり臭いがきつく、展示までの置き場所に困った記憶がある。

動物公園からの要望で「展示している道具やエサの呼び方、名称、使用方法などは、夢見ヶ崎動物公園での用例です。他の動物園などとは、異なる場合もあります。」と表示をした。

## 7 展示における工夫

会場内には、動物の図鑑を置くことにした。展示しているパネル等を見て、本で知識を深めるように導きたいのであれば、せめて会場で図鑑くら



い見られるようにしたいと考えたからだ。展示を行う際、貴重書などはさておき、通常の本はケース内に入れるべきではなく、手にとってめくるべきもの、と私は考えている。

I Cタグなどで無断持ち出しを防止する装置は、当時はなかった。紛失等の不安がなかったわけではないが、同じ会場で、コレクションの社史を手にとれるかたちで展示していた経験があったこともあり、実施に問題はないという判断に至った。

図鑑には、「夢見ヶ崎動物公園にいる動物のページに紙をはさんでみよう」と、興味を持って調べられるような工夫もしておいた。会場で本を並べるのに、カラーボックスを横向きにして長机の上に置いたところ、とても収まりがよかった。先述した「飼育係さんのオススメ本」も、同様に、現物を会場で手に取れるようにしている。

さらに、当館で所蔵する動物の本には、どんなものがあるのかがわかりやすいように、動物の本の並んでいる書架を棚ごとに写真に撮り、カラーで印刷して、会場に貼っておいた。2階の展示会場から、3階（科学技術室）や1階（やさしい科学コーナー）の書架は離れているため、すぐに見に行きにくい。この図書館の動物の書架には、どういう本が並んでいるのか、その場でイメージしやすくするための工夫である。会場の小さなモニターでは、動物公園に提供してもらったバックヤードツアー（2010年の秋の動物園祭りの記録）のDVDを上映していた。

動物のいる雰囲気を出せるように、鳥のさえずりのCD（イメージリスニング的なもの）を展示会場で流したり、館内にあった人工観葉植物を会場に置いたりもした。



図4 展示会場に置いた動物図鑑等



図5 会場に貼った書架の写真

## 8 展示中の対応

展示期間中にも、いろいろと手を加えていった。

シマウマのエサ（牧草）は、ケース内に入れておくだけではなく、ひとつかみをケースから出し、実際にさわれるようにした。ただし、臭うので蓋つきの容器に入れておいた。

動物公園で「シマウマの赤ちゃんが誕生」や「レッサーパンダの子ども

の名前がカリンちゃんに決定」というニュースがあると、展示会場でも速報した。

開催中は「夢見クイズ」を実施し、会場にクイズの用紙を置いた。クイズの内容は会場にある展示品やパネルを見れば答えがわかる簡単なものである。「Q. 夢見ヶ崎動物公園のシマウマが食べているものは？ ア. チモシー牧草 イ. スパゲッティ ウ. メザシ」といった具合である（正解はア）。5問中1問は「Q. 神奈川県立川崎図書館が専門としている分野は？ ア. 法律と医療 イ. 文学と歴史 ウ. 科学技術と産業」のように、当館のPRになる設問も交えた（正解はウ）。会期中、何回か問題は入れ替えている。

クイズの回答者には、3階のカウンターで、動物の写真と催事のロゴが入ったポストカードをプレゼントした。何種類か作成し選べるようにした。

当館ホームページからは、動物の写真にロゴを入れたパソコン用の壁紙をダウンロードできるようにした。数週間ごとに追加していった。実際にパソコンの壁紙として使われたかは不明であるが、話題作りの意図もあった。

催事用のロゴも作った。いろいろなところに使える上、催事らしさも出るので重宝した。

展示会場には、感想を入れる箱を置いていた。「飼育員さんの努力で貴重な動物が保護されていることに、すごい感銘を受けました。これからも頑張ってください！」「初めて来た図書館で展示品やクイズがあって面白かったです。図書館にこのような物があるとびっくりしました。また、来たいです。」「いろいろなどうぶつのほんや、つなど、おもしろいものがたくさんあったのですすごいなと思いました。こんどはほんもののどうぶつを見たいと思いました。」などの感想が寄せられた。

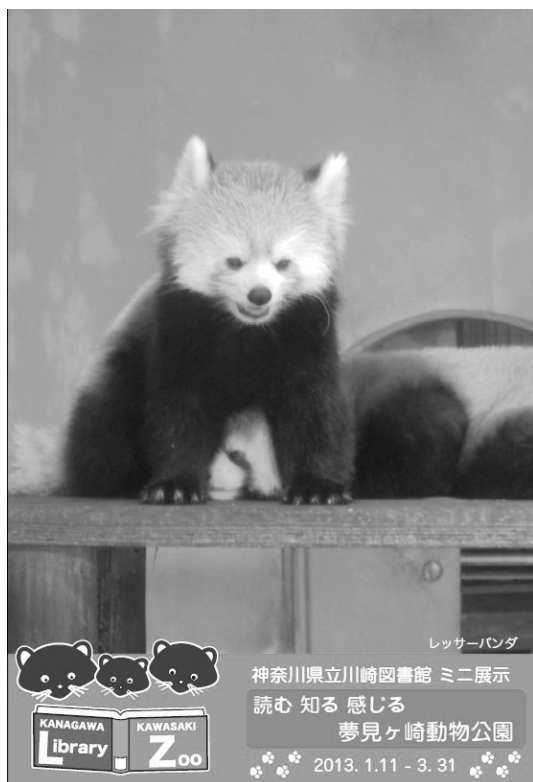


図6 配布したポストカード

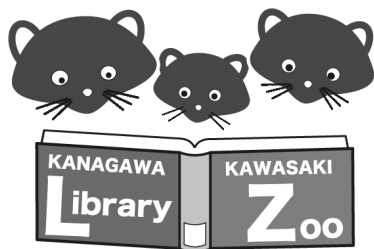


図7 「読む 知る 感じる 夢見ヶ崎動物公園」で用いたロゴ

## 9 関連講演会の広報

当館でミニ展示を開催するときには、通常、関連講演会を実施していた。

展示で得た関心をさらに深められるという趣旨に加え、講演会を併せて実施することでマスコミ等に取り上げられやすくなる、という狙いもあった。

今回の催事では、動物公園に関連講演会を依頼し、早い段階で快諾を得ていた。講師は、動物公園の鈴木友氏（獣医師）が引き受けてくれた。鈴木氏は広報の担当でもあったので、当館との窓口役でもあった。講演内容は日頃は知ることのできない動物の様子や、飼育係・獣医の仕事などを考えていた。

さて、私はある時点で、この講演会を若い人に聞いてもらいたい、高校生を対象に講演をしてみたら面白そうだ、と思いつき、イメージを膨ませていった。

ただし、その頃の当館において、少なくとも過去数年間には、高校生を対象とした講演会の先例がなかった。私の上司も、高校生対象では、「本当に申込みがあるの？」「高校生以外は聴講できないの？」と懸念を抱くことが予想された。

そこで、誰もが参加できる講演会（注：便宜上、ここでは「一般向け」と呼称する。なお、診療などの映像にショックを受ける子どもがいることに配慮し「小学生以下の方は同伴できません」と告知している。）に加え、実験的に高校生向けにも講演会を開催する、というプランを考えた。

まず、講師の鈴木氏に「高校生を対象にも講演をしていただけないか」と話しを持ちかけた了承を得た。（この時点での私は、まだ動物公園の獣医の多忙さをきちんと認識できていなかった。もし、そうした状況を知っていたら、2回分の講師依頼は控えていたと思う。）

その上で、上司に「講師も若い人に話すことには前向きなので、ぜひ、高校生向けの講演会を開催させてほしい」と伝え承認された。日程は、一般向けを3月8日（金曜日）、高校生向けを3月10日（日曜日）、に実施することとした。

こうした経緯があったので、募集をしてみたけれど高校生は集まらなかったとは言いにくい。もしそうになると、次から同じような趣旨で、私もしくは同僚が企画をしたとき、負の先例となって足かせとなってしまふ。逆

に成功すれば「以前、こうした催事があって好評でした」と行いやすくなる。

どうやったら高校生が集まるのかを考えた。通常、県立高校等に広報をする場合、チラシを高校の図書館に送っているが、それだけだと、やや効果が薄いような気がした。

動物に関心のある生徒は、生物部に属しているのでは、とひらめいた。公立・私立を含め高校のホームページには、たいてい部活動の一覧を載せているので、生物部、科学部、理科部などのある高校をリストアップしていった。チラシの送付先は「〇〇高校 生物部顧問の先生（または生物担当教諭様）」宛にした。その時に送った添状には「同封のチラシの掲示・配布などで、生きもの・動物、動物園、獣医師や動物関係の仕事などに関心のある生徒などに、お知らせしていただけませんか。」と記した。

\* \* \* 神奈川県立川崎図書館【講演会】 \* \* \*

3月10日(日) 13:00-14:30

**「高校生に教える  
夢見ヶ崎動物公園の  
飼育・作業・診療」**

動物って  
たのしい

KANAGAWA library KAWASAKI ZOO

川崎市夢見ヶ崎動物公園での動物たちの飼育や、日々の作業、診療などについて、わかりやすく紹介します。実際に現場で行われている動物たちの治療やお引越、シマツマの繁殖、シカの角切りなど、飼育係だから知っているエピソードを交えて画像を見ながらお話していく予定です。  
高校生の皆さんにお話するのを楽しみにしています。

講師：鈴木 友さん（川崎市夢見ヶ崎動物公園 飼育診療担当係長/獣医師）

会場：神奈川県立川崎図書館

定員：30名（無料）

申し込み：ホームページなどから。

お問い合わせ・詳細は、お気軽に…

神奈川県立川崎図書館  
電話 044-233-4537  
FAX 044-210-1146

神奈川県立川崎図書館 検索

〒210-8501 川崎市川崎区宮前1-1-1  
TEL 044-233-4537 FAX 044-210-1146

JR川崎駅・京急川崎駅下車 徒歩15分くらい。

▲ペンギンにエサをあげている講師の鈴木さん

図8 高校生向け講演会ポスター

高校生向けのチラシは、一般向けとは別に作成した。タイトルは「高校生に教える 夢見ヶ崎動物公園の裏側～飼育・診断・診察～」とし、「高校生に教える」の部分に強調した。講師による紹介文にも「高校生の皆さんにお話しするのを楽しみにしています。」とメッセージを加えてもらった。

高校生限定を強調しているのは、その方が高校生は心理的に参加しやすいのではないか、という判断による。チラシの応募の説明には「高校生など若い方限定とさせていただきます。(高校生程度の年齢の方、ぜひ参加したいという中学生や専門学校生・大学生などもお申込みできます。)」と、多少の幅を持たせておいた。

チラシに加え、ポスター（A3版）も同封しておいた。学校の場合、チラシ数枚を送るよりは、一定期間、掲示されるポスターでのPRの方が有効であると考えた。

学校からFAXで数名分、申し込みが届いたケースもあった。先生が取りまとめてくれたのだろう。

なお、一般向け講演会のチラシ・ポスターは、近隣の動物病院に配布や掲示を依頼することも考えはしたが、実際には行わなかった。

## 10 関連講演会の反応

高校生向けの講演会は35名が参加した（一部、中学生や大学生も含む）。受講者は熱心に聴講し、講演後も講師を囲んで、進路も含め、いろいろな話をしていた。

アンケートの「申し込んだ理由」（複数回答可）では、「動物園や動物の仕事に関心がある」（25件）、「動物が好き」（22件）、「学校の先生にすすめられて」（10件）となった。進路とからめると関心が増すこと、学校の先生の助力を得られていたことがわかった。開催が3月10日と、比較的、学校行事に重ならない時期だったことも、参加がしやすかった一因であったと捉えている。

「県立川崎図書館が科学技術系の専門図書館だと知っていましたか？」という設問は、「知らなかった」が33件と大半であった。これは想定内で、

むしろ知らなかった方にこそ「科学技術系の専門図書館なのか」と認識してもらおうためのPR的な設問であった。

「今日の講演を聴いて、夢見ヶ崎動物公園に行きたくになりましたか？」には、33件が「ぜひ行きたくなった」、1件が「しばしば行っている」で、「それほど行きたくならなかった」はなかった。動物公園への集客という点でも、ささやかな貢献はできたのかもしれない。



図9 高校生向け講演会の様子



図10 高校生向け講演会の終了後



アンケート用紙の自由記入欄には、下表のような記入があった。いくつか紹介しておく。

表1 アンケート用紙の自由記入欄より（抜粋）

<p>今日の話聞いて、もっと動物に興味をもてたし、獣医師になって、多くの動物を救いたいなと思いました。また、こういう講演があったら参加したいです。</p>
<p>野生動物たちを守るために飼育員や獣医が活躍しているのがわかりました。今度、あらためて動物園に行きたいと思いました。</p>
<p>獣医を目指しているので、実際に治療しているところが見られて、とても参考になりました。</p>
<p>本当は獣医学部に進みたかったのです。残念ながら受験に失敗してあきらめました。ですが、今回講演を聴いて、獣医師になる夢をあきらめないことにしました。過酷だとは思いますが、頑張りたいと思います。</p>
<p>将来、動物園で働きたいと思っているのでとてもためになる講義でした。学校で教わることのできない内容で面白かったです。こういった内容の講義をまた開いてほしい。</p>
<p>動物園で働くことはかなりの大変な作業が多いことを、あらためて知りました。自分の体の状態を言葉で伝えられない動物の体調を知るには鋭い洞察力が必要だということもよく分りました。</p>
<p>動物公園の細かい所まで教えて頂けたのでとても面白かったです。将来、動物関係の仕事につきたいので勉強になりました。</p>
<p>いろんな動物たちの状態や生態を知ることができたと、裏側なども見てとても参考になったと思います。今後の自分の進路でも考えていきたいと思いました。</p>

通常、大人を対象とした講演の場合、「今日は教養を得られ有意義な時間であった」（そして当館としては、図書館を利用してもっと深く学んでほしい）となることが多い。しかし高校生の場合、とくに進路に関わるテーマ

だと、講演という機会が、人生に変化を与えるきっかけになることもあるのだと、あらためて認識させられた。

本稿では、より特徴的な高校生向けの講演会を中心に記したが、一般向けの講演会「獣医が語る 夢見ヶ崎動物公園の裏側～飼育・診断・診察～」には平日ながら27名の参加があった。

アンケートの設問「申し込んだ理由」（複数回答可）は、「動物園や動物の仕事に関心がある」（18件）、「動物が好き」（17件）、「動物園が好き」（14件）、「夢見ヶ崎動物公園が好き」（5件）となっている。設問「今日の講演を聴いて、夢見ヶ崎動物公園に行きたくくなりましたか？」には「ぜひ行きたくなった」が15件（内訳「はじめて」5件、「数年ぶり」10件）、「しばしば行っているが、さらに興味が増えた」は10件となり、動物公園のリピーターやファン、常連の方が多く参加していたとわかる。

なお、2回の講演に際して、私は「短い時間でよいので、本の紹介などは、ぜひお話ししていただきたい」と講師に依頼していた。これは、図書館で開催する講演という要素を少しでも盛り込みたかったからである。講演では数冊の本の紹介があったと記憶している。

余談ながら、講師からは事前に、飼育動物の健康状況に大きな変化があった場合、講演中でも引き返さないといけない、といった話しを聞いていた。講演当日は動物の無事を祈っていた。

## 11 催事を終えて

展示は3月31日で終わった。次の展示の準備を始めるため、また、展示品を返却するため、すみやかにケースを空ける必要がある。動物のエサを入れていた展示ケース内にもった臭いはかなり強烈だったので、消臭剤を大量に使って臭いの除去に努めた。

さて、動物公園の展示後も、私はいくつかの立場で何回かのミニ展示に携わってきたが、いまだ動物公園の展示のような達成感を得られずにいる。

一般的に図書館では、本を並べ、紹介する展示が基本となるだろう。ただ、テーマ、企画、連携先との関わり、広報、見せ方の工夫、準備など、

さまざまな要素が組み合わさると、今回のような展示ができることを知った。動物公園との展示では、課員が展示の準備を楽しんでいたことも大きかった。実際に取材などに赴き、準備を進める行為は、モチベーションにもなっただろう。

ミニ展示「読む 知る 感じる 夢見ヶ崎動物公園」は、こうしたいくつかの要素が、うまく噛み合っていた催事であった。

この事例が、図書館での催事を考える上での一助となれば幸いである。

最後になるが、夢見ヶ崎動物公園のスタッフの方々の大きなサポートが、展示の成功に欠かせなかったことは言うまでもない。この場を借りて、あらためて感謝を述べ結びとしたい。

## 12 関連記事

ミニ展示「読む 知る 感じる 夢見ヶ崎動物公園」は、以下の新聞に記事が掲載された（主なもの。開催告知だけの記事は除く）。いずれも、企画の趣旨や、写真などを交えた、丁寧な内容の記事であった。

- 1) 夢見ヶ崎動物公園展が人気. 読売新聞. 2013年1月24日, 朝刊, 川崎版.
- 2) 県立川崎図書館 動物園を「見せる」. 東京新聞. 2013年1月25日, 朝刊, 川崎版.
- 3) 図書館の中で動物園を紹介. 朝日新聞. 2013年1月31日, 朝刊, 第2神奈川版.
- 4) 夢見ヶ崎の動物知ろう. 神奈川新聞. 2013年2月7日, 朝刊, 川崎版.